こんな先生いるよ！

「天然物化学が好きで、熱帯性感染症の研究へ」

薬学部　薬学科　講師
安元加奈未（やすもとかなみ）先生

天然から、薬の種を探す

薬学にも様々な分野がありますが、先生はどんな研究をなさっているのでしょう。

私の研究は、基本的には「天然物化学」という分野になります。これは植物、海洋生物、菌など、自然界に存在するものから薬を探求する学問です。植物や海洋生物は自分の体の中に有機化合物を作り出すのです。それは直接生命に関わるものもあれば、一見そうではなくても、実はその種を維持するために重要なものだったりすることもあって、それらが薬の「種」になることが多くあるのです。

具体的な仕事といえば、そういったものを取り出して化学構造を明らかにし、生理活性を見いだす、ということが中心になります。

今は、熱帯感染症であるリーシュマニア症という原虫性の病気について研究しています。これは熱帯地域の感染症で、日本ではほとんど見られない病気ですが、世界には80ヵ国、1200万人以上の人が感染していて、その多くが適正な治療も受けられないのが実情です。

理学部から薬学研究の道へ

大学では理学部に在籍し、その後薬学の道に転向されたそうですね。

私が化学に興味を持ったのは、高校生の頃からだと思います。子供の頃に料理をしていてその茹で汁の色が変わるのを見て面白いなと思ったという体験がありました。また、当時の高校の化学の先生が放課後に実験をさせてくれたり、そういう環境も影響が大きかったと思います。

大学3年のとき、天然物化学の分野で著名な楠見武徳先生の集中講義を受け、その講義に深く感銘を受けたことが大学院進学のきっかけとなりました。

植物や海洋生物、微生物などが作り出す薬の「種」は、使い方や量によってはとても危険なものにもなります。だから、自然のものだから優しいという感覚ではなく、化学物質としての性質をきちんと捉えることが重要です。私は天然物化学の研究に携わってから今までずっと、自然が創り出す人知を越えた複雑な化学構造に強く惹かれ、同時に敬意を感じています。

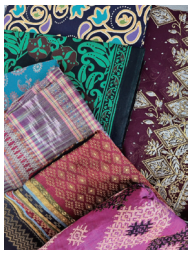
ミャンマーの工芸品に魅了されて

熱帯地域に関わってきて、何か研究以外にご自身の思い出になるものはできましたか。

仕事が趣味のようなもので、他に特筆すべきものはあまりないのですが、私はずっと伝統工芸に興味があり、特に日本の着物が好きです。

パンデミックが始まる前は、調査のためにミャンマーなどへ頻繁に訪れていましたが、現地にも伝統的な織物工芸があって、民族などによっても違いがあり、それらを集めて持って帰ってくるのが楽しみでした。また、前職で長く住んだ香川県の特産品で、蒟醤塗（きんまぬ）りという工芸があるのですが、この源がミャンマーなどにあり、ミャンマーの工芸も興味深いです。

太田正人（ジェイクリエイト）



[写真左] ゼミ後にラボメンバーから誕生日プレゼントのサプライズ
[写真中] 美しさに魅了されて収集したミャンマーなどの伝統的な織物
[写真右] 蒟醤塗りの原点とも言われるミャンマーの漆工芸品